

10

月、まだ2カ月もあるというのに空港にはクリスマス飾りつけがあらちこちに。州都バコロド市の最大のお祭りであるマスカラ・フェスティバルも終わり、人びとの気持ちはもうクリスマスに向いているらしい。しかし空港の外に出ると、いつもののんびりとした空気が流れていた。市内に向かう道中で、サトウキビを満載した10トントラックと何度もすれ違う。9月から各地で一斉に収穫が始まったようだ。毎年6月〜8月まではサトウキビ栽培の農閑期となり、島の経済は停滞する。この「死の季節」をようやく抜け出し、今、収穫は真っ只中。島は活気付いていた。

バコロド市内では、最近あちこちで新しいコンビニエンス・ストアを見かけるようになった。日本のセブン・イレブンが進出している。3年前に私が初めてバコロド市を訪れた時はまだ珍しく、「日本のコンビニがここにもある！」と驚いたものだ。だが今では島の各街で当たり前の光景になった。この1〜2年で大きなショッピングモールも新しく2つできた。ネ

グロスは日々変化・発展しているように思える。

ここ数年、フィリピンの経済成長がニュースを賑わしているが、本場のところ、この景気は人びとの生活にどのような影響を与えているのだろうか。40万の人口を抱えるバコロド市内で働き、生活をしている若者にスポットをあて、話を聞いてみた。

華やかなショッピングモールで働く非正規雇用者たち

「週に6日間、モールで倉庫の品出し、在庫の整理をしています。勤務時間は朝10時〜夜8時まで。たまに残業で9時、10時になることもあります。給料は日給260ペソ(約700円)。

非正規雇用なので、働きぶりによって3カ月毎に契約延長となります。私は1度延長をして今5カ月目です。主な支出は、食費が2000ペソ、生活費が2000ペ



【上】バコロド市内の巨大なショッピングモール。【右下】下校中にコンビニに立ち寄る高校生たち。



ソ、家賃が800ペソ、親に1000ペソ仕送りしています。月の収入が6500ペソ(約1万7500円)だから手元に残るのは1000ペソ未満。仕事も大変だし、来月延長するか考え中なの」

——ジニーさん(女性・21歳)
ガイサノ・モールで倉庫係

バコロド市で一番賑わっているSMモールに行ってみた。土曜日ということもあり、家族連れ、カップル、多くの若者たちであふれている。みんな綺麗な靴を履き、おしゃれな服を着ている。私が生かしていたカネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KFRC)から車で1時間半移動しただけでこれほどまでに人びとの暮らしの様子が変わるものかと、改めて驚いた。

入ったから、働き始める前に7000ペソぐらいもらったよ」

——ジョンさん(男性・22歳)
米系企業Teleenergy勤務

「私はコールセンターで働きますが、大学に通っています。大学3年です。コールセンターで稼いだお金で学費を払っています。3年前、大学入学前から働き始めて、現在の給料は1万8000ペソ(約4万8000円)です。始めは5カ月の間の契約でしたが、無事に正規の雇用になりました。勤務は夜8時〜翌朝5時まで。朝7時半から授業がある日は、とても眠いです。学費は大学によって異なりますが、私の場合は公立に通っているのですが、年間大体2万ペソ以上かかります。実家暮らしなので家賃は必要ないですが、交通費や食費で月に

約5000ペソほど使います。夜勤は辛いけれど、給料が良いので、学費を払うために今後も続けていきます。私の職場では約2000人が働いていて、毎月働きぶりやお客さんの満足度によって、各スタッフに点数が付けられます。点数が低すぎるとクビになることもあります。紹介料として、紹介した側、された側それぞれに2500ペソずつがもらえます。マネジャーは優しくて職場の環境は良いけれど、自分の点数に毎回ドキドキしています」

——ジャンさん(男性・21歳)
米系企業Telecom勤務・大学生

都市の生活費は農村の2倍

そもそも農村と都市では生活費にどれほどの違いがあるのだろうか。持ち家があり、子ども(小学生

モール内のスーパーマーケットもたくさん富裕層で賑わっている。特に私が驚いたのは、野菜コーナーで、公共市場の約2〜3倍の値段にも関わらず、次から次へとお客が来る。市場が遠くにあるわけではない。スーパーから10分ほど歩けば、安くて新鮮な野菜が市場で手に入るといふのに、何人かのお客曰く、市場は臭く、暑くて行くのも面倒なので、ついついスーパーで買ってしまわらしい。いつも農場で採れた新鮮な野菜を食べている私には、目の前のしなびた野菜に倍以上の値段が付けられていること、それにも関わらず需要があることにとても驚いた。

若者に人気の外資系コールセンター

ショッピングモール内の案内表示や看板、商品の説明は、ほとんどが英語で書かれている。町に出ても英語表記が多く、英語圏の人が暮らすのに不自由はない。小学1年から英語教育を受けるため、英語を話せる若者は日本と比べてはるかに多い。そこに目をつけ、海外向けのコールセンターの立派な建物がバコロド市内にいくつも

ハイスクールの4〜5人という数家族に、農村部と都市部でそれぞれ話を聞き、1カ月にかかる費用を比較したところ、生活用品、教育費はさほど変わらず、食費と光熱費に大きな差があることが分かった。農村部では、食費が3000ペソ、光熱費が500ペソ、生活用品に2500ペソ、小学校からハイスクールまでの教育費(交通費や昼食代も含む)が一人につき1000ペソ。1カ月に約2万ペソの支出となる。都市の生活は、農村に比べて贅沢であることはもちろんなのだが、食べものを全て外で買わなくてはならないこと、料理用のガスを使っていること、携帯電話やパソコン、冷蔵庫やクーラー・扇風機など、電化製品の使用が多いことが食費と光熱費増につながっている。一方、農村では裏庭や敷地内で野菜や果物を育てていること、料理のための火には薪やココナツの皮を

轟轟と音を立てる製糖工場。辺りはサトウキビの匂いが立ち込めている



「予算を砂糖産業に充てているということは、何らかの対策やサポートがあるのだと期待しています。サトウキビを砂糖にするのではなく、他の利用方法としてバイオエタノールやバイオエタノール生産があります。すでに工場を建設しているところもありますが、それらには限界があります。バイオエタノールに関して言うと、24時間工場をフル稼働したとして、1500トンのサトウキビしかバイオエタノールにできませんが、砂糖精製の場合は、2万トンものサトウキビを処理できます。バイオエタノールやバイオマスに切り替えるにしても、ネグロスのサトウキビ地主全員が切り替えることはできません。私は以前、服の原料となる

「朝7時〜夜6時まで発電所の建設現場で働いています。6時までといっても、いつも残業があるので8時くらいまで働きます。給料は、日給298ペソ、残業代が1時間につき47ペソなので、月に約9000ペソ(約2万4300円)くらいもらえます。ハイスクール卒業後、約半年間就職活動をしてやっと見つけた仕事なのですが、4カ月の契約なので、今後どうなるのかわからないのが不安です。今ガードマンの資格免許を取得しようと考えています。上手くいけばそのまま発電所で働けるかも……」

——ジョシユアさん(男性・19歳)
バイオマス・太陽光発電所建設労働者

砂糖の関税引き下げは、30年前を彷彿させる「第二の砂糖危機」を引き起こすのか、という懸念がささやかれているが、ネグロス島のサトウキビ栽培に関わる当事者たちは、この事実をどう捉えているのだろうか。そもそも関税の引き下げについてどれほどの危機を感じているのだろうか。サトウキビ栽培が盛んな地域の地主たちに話

ラミー(麻)の栽培をしていたことでもあります。もし、サトウキビ栽培をやめなくてはならなくなったら、またラミーを植えるかもしれないですね。生産者みんながラミーを植えてしまったら困りますけど。いくつかの中国企業がネグロスの砂糖を買い付けに来ているという話を聞いたことがあります。ネグロスや国内で砂糖が売れなくなっても、世界の砂糖の需要はあまり変わらないと思うので、外国に輸出することも考えています。あまり危機感というのはありません。先ほども言いましたが、ネグロスで今何も起きていないし、今までと変わらず買いつけてくれていません。私の周りでも関税について知らない人は多いのではないかと思います。砂糖が売れなくなっています。砂糖が売れなくなってしまうたら、フィリピン国内の約6割のサトウキビ生産を占めているネグロスにとっては、もちろん大打撃です。ですが、今は1980年代とは違います。昔の地主たちは毎日を遊んで過ごしていました。今の世代は大学を卒業し、各々が専門知識を持っていますし、多くの地主たちはサトウキビ生産以外にも、レストラン経営や不動産業

やIT産業など、それぞれが別のビジネスを持っています。ですから、80年代に起きた危機は起こりづらく、私たちも対策や解決方法を生み出し、助け合うことができると信じています」

——100ヘクタール以上を所有する中規模地主(ラ・カルロータ市)

若い農民たちへの希望

80年代のネグロスの砂糖危機は、砂糖の国際価格の暴落が引き金となり発生した。現在懸念されている「第二の砂糖危機」は域内関税の引き下げによるもので、プロセスが異なる。ネグロスの砂糖の価格が下がるわけではない。

KFERCを卒業した若者たちはそんなことを知ってか知らずか、同世代の雇用問題や関税引き下げ問題よりも明日の天気の方に関心があるようだ。自分で育てたものを食べ、多い分は売ってお金にして魚を買う。

都市の方が仕事も多く、給料も良い。そんな期待を胸に目をキラキラさせて農村を出て行き、1年もしない内に疲れ切った顔で実家に戻ってくる若者を駐在中に何人も見てきた。みんな「朝から晩ま

な。ネグロスにはたくさん砂糖があるし、砂糖はみんな必要ないじゃないか。コファンコ家(華人系大財閥)のプランテーションを見てごらんよ。これまでのマンゴー栽培を辞めて、まさに今、サトウキビに転換しているじゃないか。あれほどの大企業だもの、しっかりと調べて算段しているはずだ。ネグロスの砂糖が売れなくなることはないさ。コファンコが続ける限り私たちがサトウキビ栽培を続けるよ」

——50ヘクタール以下を所有する小規模地主(ラ・カステリアナ町)

「関税引き下げについては知っています。11月にマニラで開催されるAPECで何か新しい動きがあるかもしれないので、年明け1月ぐらいいまで様子を見るつもりです。今ネグロスには何も起きていません。だから何もしようがありません。だから何もしようがありません。もし、私たちの砂糖が売れなくなってしまうたら、サトウキビ生産をやめなくてはならなくなるのかもしれないが。ただ国内で砂糖の需要は十分にあり、消費し切れるので問題はないと考えています。政府が約20億ペソもの

使用していること、湧き水や井戸があることが利点なのかもしれない。大学にかかる費用は、公立や私立で大きく異なり、年間一人当たり、公立で約2万ペソ、私立では10万ペソとなる。

バイオマス・太陽光発電所も出現

はじめに「ネグロスは日々変化・発展しているように思える」と書いた。都市部では新興住宅の建設、大ショッピングモールの建設と、近代化に向けて忙しい。それでも、車で1時間も移動すれば広大なサトウキビ農園が広がる景色は相変わらず変わりがなかった。しかし現在、ネグロス島独特のその風景が大きく変わってしまうかもしれない事態が起きている。

ASEAN自由貿易協定(AFTA)により、2015年1月から、砂糖の域内関税がこれまでの10%から5%にまで引き下げられたのだ。安い砂糖が海外から輸入される可能性が一気に増した。サトウキビの新しい価値を生む代替案としてなのか、KFERCがあるラ・カルロータ市にもドイツ企業によるバイオマス・太陽光発電所の建設が昨年からはまっている。

「朝7時〜夜6時まで発電所の建設現場で働いています。6時までといっても、いつも残業があるので8時くらいまで働きます。給料は、日給298ペソ、残業代が1時間につき47ペソなので、月に約9000ペソ(約2万4300円)くらいもらえます。ハイスクール卒業後、約半年間就職活動をしてやっと見つけた仕事なのですが、4カ月の契約なので、今後どうなるのかわからないのが不安です。今ガードマンの資格免許を取得しようと考えています。上手くいけばそのまま発電所で働けるかも……」

——ジョシユアさん(男性・19歳)
バイオマス・太陽光発電所建設労働者

砂糖の関税引き下げは、30年前を彷彿させる「第二の砂糖危機」を引き起こすのか、という懸念がささやかれているが、ネグロス島のサトウキビ栽培に関わる当事者たちは、この事実をどう捉えているのだろうか。そもそも関税の引き下げについてどれほどの危機を感じているのだろうか。サトウキビ栽培が盛んな地域の地主たちに話

「今年には砂糖の買い取り価格が上がっている。スーパーでも昨年の1キロ30ペソから今年は40ペソまで値上がった。しかし収穫量も減っている。去年は1ヘクタール当たりサトウキビを60トン収穫できたのに、今年は今のところ50トンしか収穫できていない。エルニーニョの影響だね。まだ収穫は全部終わっていないから正確には分からないが、今年の買い取り価格は高くて、儲けは去年ほどにならない予想だ。関税の引き下げについては知らなかったよ。でも、そんなすぐにタイや他の外国から安い砂糖が入ってくるとは思わない

な。ネグロスにはたくさん砂糖があるし、砂糖はみんな必要ないじゃないか。コファンコ家(華人系大財閥)のプランテーションを見てごらんよ。これまでのマンゴー栽培を辞めて、まさに今、サトウキビに転換しているじゃないか。あれほどの大企業だもの、しっかりと調べて算段しているはずだ。ネグロスの砂糖が売れなくなることはないさ。コファンコが続ける限り私たちがサトウキビ栽培を続けるよ」

——50ヘクタール以下を所有する小規模地主(ラ・カステリアナ町)

「関税引き下げについては知っています。11月にマニラで開催されるAPECで何か新しい動きがあるかもしれないので、年明け1月ぐらいいまで様子を見るつもりです。今ネグロスには何も起きていません。だから何もしようがありません。だから何もしようがありません。もし、私たちの砂糖が売れなくなってしまうたら、サトウキビ生産をやめなくてはならなくなるのかもしれないが。ただ国内で砂糖の需要は十分にあり、消費し切れるので問題はないと考えています。政府が約20億ペソもの



バコロド市内から近くの太陽光発電所。かつてはサトウキビ農園だった。

ネグロス食料サミットを終えて

小林和夫 / こはやし・かずお
（オランダ・トレッド・ジャパン政策室）

2015年に締結されたASEAN自由貿易協定によって砂糖の枠内関税が5%まで引き下げられ、安いタイ産砂糖がフィリピンに流れ込むことで砂糖の島ネグロスでは第2の砂糖危機の到来が懸念されています。自由貿易の後押しされた巨大食品企業が食のシステムをますます自由に支配できる時代のなかで、農民・消費者がどう連帯し、対抗できるかを討議するため、2015年11月7日、オランダ・トレッド社(ATC)とオルター・トレッド・ジャパン(ATTJ)は、ネグロス食料サミットを開催し、8カ国から約140名が参加しました。サミットでのさまざまな報告から、30年前の飢餓と貧困とは異なる、農民・都市住民が直面する食の危機が明らかになりました。

ATC社長ヒルダ・カドヤさんの基調報告によると、1980年代半ばに始まった砂糖農園の農地改革(ランド・リフォーム)で労働者に分配された農地は、規模拡大による生産性向上という理由で、企業や大地主への農地の再集

積(ランド・リターン)が止まらず、輸出用バナナやパイナップルのプランテーションがネグロスにも進出し、大規模な土地転換が進んでいるとのこと。

都市部では、輸人品、添加物まみれや遺伝子組み換えの食品を多く扱うショッピング・モール、コンビニ、ファストフード店が増加しています。パコロド市で急成長しているコールセンターでは約2万人の労働者が深夜労働に従事し、24時間営業のコンビニやファストフード店を急増させる要因となっています。ヒルダさんは「今こそ、安全な食のシステムを生産者と消費者が連帯してつくるべきだ」とアピールしました。

ネグロスで地産地消をつくるために

ATC社従業員互助会であるATC信用協同組合(ATECCO)副委員長のシエイラさんの報告も興味深いものでした。ATECCOでは遺伝子組み換え作物の問題を描いたドキュメンタリー映画『遺伝子組み換えルーレット』上



「THE BOX」の野菜を仕分けするATC職員。

映をきっかけに、バナナやサトウキビの生産者が自家栽培する安全な野菜や食材を直接仕入れてメンバーに販売する宅配サービス「THE BOX」を立ち上げました。シエイラさんは「ネグロスで生消提携を軸にした有機農産物を求める消費者運動、食の運動を起こしたい。日本や韓国の消費者運動が培ってきた産消提携の経験と実績、知恵をぜひ教えてほしい」と決意を語りました。

もう一人、ATECCOメンバーで11歳と8歳の障がい児を抱えるアルジーさんが母親としての苦悩と挑戦について報告しました。二人の好物はファストフード店のピザ、ハンバーガー、フライドチキン。家庭では肉中心の食

事によって、肥満、アレルギー、ぜんそくを患うようになりました。ATECCOのセミナーに参加して安全・安心な食の重要性を確信したアルジーさんは、ファストフードや加工食品をできるだけ避け、市場で地産の野菜、魚や果物を調達し、「THE BOX」からも毎週購入するようにしました。さらに裏庭やプランターで様々な野菜やハーブを栽培して調理することで、子どもたちも少しずつ野菜を食べるようになったそうです。

ネグロスと日本の連帯運動が30年近く続いた理由に、民衆交易を通じて命の原点である食べものを扱ってきたこと、運動の担い手(消費者)が主に女性だったことがよくあげられます。シエイラさん、アルジーさんの発表は、日本、韓国の生協関係者、とりわけ女性の参加者たちから、一人の母親として非常に共感したという感想が出ました。

これまで作り上げてきた北の消費者が南の生産者を支える関係を越え、消費者と生産者が出会い地産地消の仕組みを作っていくために、北の消費者と南の消費者、北の生産者と南の生産者の交流を、このサミットをきっかけに作っていくことが、ATCとATTJのミッションの一つであると強く感じました。

気候変動危機を共有したCOP21「パリ協定」 —日本の市民の責任とは—

吉田明子 / よしだ・あきこ
国際環境NGO FoE Japan

フランス・パリで開催されていた国連気候変動枠組み条約第21回締約国会議(COP21)は12月12日、京都議定書にかわる2020年以降の新たな枠組み「パリ協定」を採択し閉幕しました。

米国などの先進国や中国やインドなどの大量排出国、よりシベリアに影響を受ける島嶼国や途上国の意見のギャップは大きく、交渉は難航していましたが、今回、196カ国・地域の全締約国が、気候変動の脅威と対策の必要性を共有して、初めてひとつの合意に至ったということは、遅ればせながらも一歩進んだと言えるでしょう。

長期的な目標の共有

産業革命前からの世界の平均気温上昇を2℃未満に抑えることについて明記されたほか、島嶼国の訴えを盛り込む形で1.5℃に抑える努力をするなどが併記されました。ただ、現在す



「1.5℃未満」を訴えるFoEメンバー。

に気温上昇は0.8℃以上あり、各国が出している現在の削減目標を足し合わせても、3℃以上の気温上昇が避けられないとされています。このギャップをどう埋めるのか、大きな課題が残されています。

実際に気候変動影響を食い止める具体的な義務づけや対策については、日本や米国などの思惑によって、具体的

な記述や表現が削られた部分が多々あります。各国は5年ごとに排出削減目標を国連に提出し、対策を進めることが義務付けられましたが、目標達成の義務化は見送られました。

「損失と被害」と途上国への資金支援

これまでになかったような海岸侵食や洪水、台風被害など、適応できない「損失と被害」が明らかになってきています。2010年のカンクン会議で提起された「損失と被害」について、今回のパリ協定では本文に条項が設けられたことは、最低限の前進ですが、損失や被害を具体的にどのように評価するのかなど、課題は山積みです。多くの途上国が目指した先進国からの資金支援については、協定本文には盛り込まれませんでした。2009年、先進国は2020年までに途上国への支援を年間1千億米ドルに引き上げる約束をしており、この目標を達成するためのロードマップと2020年以降の支援拡大が明記されるかどうかも焦点となっていました。法的拘束力のない別文書への記述にとどまりました。

市民社会の声

FoE (Friends of the Earth) グループは、アジアやアフリカ、中南米などにも多

数のメンバー団体を持ち、特に気候変動の影響を強く受ける途上国の視点から「Climate Justice」を掲げています。その観点から今回のパリ合意を「先進国の思惑による失敗」と批判、また市民社会グループの交渉への参加・傍聴を排除した「密室プロセス」であると批判します。今回のパリでは、11月29日に予定されていた大規模な市民パレードはテロの影響で開催ができませんでした。一方で、2000以上の「靴」を道路上に並べるアクションや、スマートフォンやGPS機能によって、パリの街のオンライン地図上にCLIMATE JUSTICE PEACEの文字を浮かび上がらせるなど、クリエイティブな活動が繰り返されました。

日本はといえば……。そもそも提出している目標数値(2013年比26%削減)は1990年比18%削減が、温室効果ガス排出に責任のある先進国として非常に不十分なもの。また、原発や石炭の維持・推進を前提としている非現実的・無責任な計画のままであることを、改めて問い直さなければなりません。

世界の声、市民社会の声を受けて、今後どのような道を進むのか。私たち自身も、今回のCOP21パリ会議をめぐる議論を見直し、日本の市民としての選択を考え直すときです。

03

カネシゲファームの

ドタバタ騒ぎ



01

寺田 俊 / たらだ・しゅん
APLA事務局



養豚についてはジョネルくんにお任せ!

「コケッコ〜」太陽が昇り、鶏たちの騒がしい声とともにカネシゲファーム・ルーラルキャンパスR FRCの1日が始まります。私は研修期間も含め、この農場で約1年半生活をしていました。農場では、ヤギや牛や豚たちの鳴き声や遠くを走るトラックの音の合間に草木が揺れる音まで聞こえそうな、ゆったりとした時間が流れています。しかし、人間たちはというとそうではないのです。毎日、予期せぬ事だらけ。あでもないこでもないで、ドタバタさせられない毎日が続いています。起床後は、みんなでコーヒーを飲みながら、1日の準備をしますので、何だか今日は朝から慌ただしい様子の養豚担当のスタッフ、ジョネルくん。理由を聞いてみると、Facebookで知り合った友だちがK F R Cに遊びに来るらしいの

です。農場で採れた果物とコーヒーを用意してから、水浴びをして、よそ行きのTシャツに着替え準備万端のジョネルくん。あまりの気合いの入れ方に、私もどんな友だちが来るのか楽しみになっていました。やがて携帯電話が鳴り、急いで迎えに行くジョネルくん。近くまで来たようです。邪魔してはいけないなと思い、別の家で他のスタッフと一緒に過ごしていました。1時間後、やっぱり気になって様子を見に行ってみると……。

必死に肥料の説明を聞くジョネルくんの姿がありました。そう、訪問者は肥料会社の営業だったのです。たいそうなおもてなしを受けているお兄さん。営業と知ってか知らずか、真剣に話を聞いているジョネルくん。何ともおかしな光景です。

話が終わり、「友だち」が帰った後は、集まったスタッフたちと残ったコーヒーと果物でおやつタイム。話題はもちろんジョネルくんについて。いつも控えめで静な彼もためこんでいた思いを一気に吐き出し、しゃべりっぱなしです。「こんなはずじゃなかったのに!」と何度もみんなに言い聞かせます。その日は1日中みんななからいじられっぱなしのジョネルくんなのでした。

01



kakao kita

カカオ民衆交易奮闘記

13

津留 歴子 / つる・あきこ
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員



仲の良い母娘。

カカオ豆の買付けでいつも訪れているブラップ村では生産者のリーダー的存在のウィレム・ナボさんのお宅の軒先に村人が豆を持って集まっています。そのナボ家の子どもも数何度聞いても私にははっきり把握できないのです。親戚の子どもだったり、孫だったり、色々です。その中に、中学生の女の子がいます。ウィレムさんの孫なのですが、養女として引き取ったそうです。それには深い理由がありました。ウィレムさんの娘クリスティアンさんは、最初の夫の家庭内暴力により、結婚後まもなく実家に戻ってきました。その後クリスティアンさんは再婚し、男の子を授かりましたが、幸せな生活は長くは続かず、夫は交通事故で亡くなってしまいました。二度の悲劇に

見舞われた娘を見て母親のウィレムさんは、娘が自立して生きていけるように、子どもの面倒は自分が見るから大学で教員免許をとるよう応援したのです。学費もカカオや野菜を売って得たお金ですべて賄ったそうです。クリスティアンさんは、立派に大学を卒業し、今は地元の高校で歴史を教えています。元気の塊、という感じのクリスティアンさんは「いつか日本の高校生とわたしの生徒を交流させたいわ!」と屈託なく笑っています。

ウィレムさんのお向かいの家に住むレビナさんも娘を大学で勉強させるために、娘の子どもを引き取って育てています。その娘が今年やっと卒業、村の小学校の教師になったととても嬉しそうに話してくれました。娘の学費にかかったお金は日本円にして25万円くらい。すべてカカオを売ったお金よ、と上品に微笑むレビナさんです。

パパアでは女子にも教育や就業の機会を積極的に与えようという親の気持ちがあるのです。子育てからなかなか解放されなくて大変でしょうと言っていると、「娘が困っているときは助けるよ」とお母さん。パパアのお母さん、頼もしいです!

「パパアの母さん、娘のためなら「ヤーヤー」」

04

Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい? 01

『兵隊やくざ』 (1965年、日本)
【監督】増村保造 【出演】勝新太郎、田村高廣、淡路恵子

重政 栄一郎 / しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー



『兵隊やくざ』
発売元: 株式会社KADOKAWA
価格: 2,800円(税別)

昭和18年、ソ満国境近くに駐屯する部隊に新兵・大宮貴三郎が配属される。この男、元やくざでケンカ無双、天衣無縫の問題児。そんな大宮の教育係に大学出のインテリ、有田上等兵が当てられる。有田もまた、一刻も早く除隊帰国するために幹部候補試験をわざと落第する変わり者。正反対の二人だがなぜか良いコンビとなる(なんだか同性愛っぽい関係だ!)

理不尽な規律や慣習、横暴な上官に我慢できない大宮は反抗し、暴れまくる。日々ケンカ三昧で、上官でも、他部隊の多数の兵隊相手でもボッコボコだ。有田は大宮をかばい、無能な上官を理詰めで言い負かす。

この映画が公開されたのは1965年。無条件降伏から20年が経つとはいえ、戦争の記憶はまだまだ色濃く残っていたであろう。出演者にも制作スタッフにも、また観客にも軍隊経験者が数多くいたはずだ。軍隊での鬱屈した記憶を持つ元兵隊の男たちは二人の「活躍」にこそ痛快な

カタルシスを得たであろう……。

大宮は大の女好きでもある。隙を見つけては近隣の軍人専用の女郎屋に向かい、懇ろになった売春婦(従軍慰安婦・音丸の元に入り浸る。劇中、音丸は自らの境遇を嘆き、慰安婦の悲哀を語る。「胸を病んでも死ぬ日の朝まで客を取っていた女の子がいた」「金に縛られ、流れ流れてどこに行くのかしら」。戦後、帰国できた元慰安婦の女たちもこの映画を観たかもしれない。彼女たちは一体何を感じるのであるだろうか……。

悪化する戦局のもと、二人の部隊に玉碎必至の南方戦線への異動命令が下る。有田は言う。「この戦争はダメだ。馬鹿な将校の命令で戦死したくない」。二人は音丸の協力を得て、脱走を図る。生きて帰国できないと諦観する音丸は立ち去る一人に言う。「私の分まで生きてください」。

『兵隊やくざ』は全9制作作された人気シリーズであった(ここで紹介しているのは第1作。続編でも、大宮・有田の二人は中国の民間人を虐殺する上官命令に反抗したり、降伏後ソ連軍が迫るなか民間人を押し退けて我先に避難しようとする腐れ将校たちを叩きのめしたり、軍上層部の不正腐敗を暴いたり……と、娯楽映画ながら反戦嫌軍の思いが底流にある。

男たちは痛快、女たちは……

02

百姓の100章

A Farmer have One Hundred Stories.



斎藤 博嗣&裕子 / さいとう・ひろつぐ&ゆうこ
一反百姓「じねん道」



Everyday Greenpic 百姓は毎日緑の祭典*地球市民皆農運動。
http://greenpic-jinendo.seasaa.net

「百姓の100章」の「第1章」は、「生存権」生活安全保障としての百姓です。

技術の進歩によって近い将来なくなる仕事がある。10〜20年後には、今、日本で働いている人の49%の職業が、機械や人工知能によって代替することが可能(職業ごとに必要な知識や技能をコンピューターで分析、235種類の職業が代替できる確率が高い)と研究機関が分析しました。「今後、労働人口が減っていくなか、人手不足をテクノロジーで解決する可能性を示したもので、将来は、機械に多くの仕事を任せる一方、人は創造性やコミュニケーションがより求められる仕事を担うようになるのではないかと報告しています。

昔、お百姓さんは「生産者」という意味ではなく、「百のことが出来る人たち」「百の生業を持つ人た

国連は、マメ科の植物が環境に良い影響を与え土地の産出力を増し、豆類が食料安全保障や栄養摂取に貢献し、現代慢性病を防止するとして、今年2016年を「国際マメ年(International Year of Pulses 2016)」と宣言しました。「Pulse」は、豆類、豆のなる植物ですが、綴りと発音が全く同じ「Pulse」には、「動向、意向、脈拍、振動、波動、律動、鼓動」の意味もあります。国際マメ年に、色々な場所で「豆のタネ」をまくことで、時空を超えて、互いに生きていくことを感じあえたら……。

「第1章 百姓は「健康で文化的な最低限度の生活を営む」仕事と暮らさう」

「百姓の100章」の「第1章」は、「生存権」生活安全保障としての百姓です。

技術の進歩によって近い将来なくなる仕事がある。10〜20年後には、今、日本で働いている人の49%の職業が、機械や人工知能によって代替することが可能(職業ごとに必要な知識や技能をコンピューターで分析、235種類の職業が代替できる確率が高い)と研究機関が分析しました。「今後、労働人口が減っていくなか、人手不足をテクノロジーで解決する可能性を示したもので、将来は、機械に多くの仕事を任せる一方、人は創造性やコミュニケーションがより求められる仕事を担うようになるのではないかと報告しています。

国連は、マメ科の植物が環境に良い影響を与え土地の産出力を増し、豆類が食料安全保障や栄養摂取に貢献し、現代慢性病を防止するとして、今年2016年を「国際マメ年(International Year of Pulses 2016)」と宣言しました。「Pulse」は、豆類、豆のなる植物ですが、綴りと発音が全く同じ「Pulse」には、「動向、意向、脈拍、振動、波動、律動、鼓動」の意味もあります。国際マメ年に、色々な場所で「豆のタネ」をまくことで、時空を超えて、互いに生きていくことを感じあえたら……。

APLA 食堂

Kitchen APLA

今日の食材 カカオ

吉田友則 / よしだ・ともものり
出張料理「きまぐれや」シェフ

カカオ豆の因数分解

「吉田さん、これなんですよ。どうでしょう？ どういう風にしたらマーケットに出せますか？」そんな少し困り顔で相談されたのがもう5年位前だろうか。

唐突な書き出しでしたが、皆様はじめまして。旅するシェフ吉田友則と申します。どうぞよろしく申し上げます。私の自己紹介は改めてすることにして今回は念願叶って販売がスタートしたパプアのカカオを使用した「手づくりチョコレートキット」完成までの旅路について少しふれたいなあと。

話を最初にもどしますが、少し困り顔の担当者がテーブルに出してきたのが、2kgの塊のカカオマスとカカオバター。ドーンとそこに鎮座した遠く5000km向こうからやってきてくれたカカオたちは困り顔の担当者と対称的に笑っているようにみえました。

担当者の名譽のために一言説明を付け加えれば、ご存知かもしれませんが、日本でのチョコレートのマーケットは飽和状態。そこへどう入っていったらパプアのカカオを皆に知ってもらえるだろう？ と真剣に悩んでの困り顔でした。

最初は「この原料を使用したレシピとかないですか？」との問いでしたが、私の妄想は膨む一方で、勝手にノートに難解な方程式をそりゃ落書きのように図解にして書いて説明しはじめました。

大事なのは、このカカオがちゃんとうまいチョコレートとして通用スルコト。尚のこと目の前に置かれた、混じりっけなしの原料を持って消費者の皆さんに見てもらいたい触ってもらいかけたかったらいい！ そして皆さんにこれどうですか？ チョコレートってこんな長い道のりと人の手を介して届くんです、とチョコレートを食べたあとに聞いてもらいたい！

そんなキーワードを乱雑にノートに書きなぐりました。会議室にこもること数時間。マーケットが飽和しているなら、最初に消費者に直接聞い



てみよう。

この原料を持って全国あちこちにお邪魔してこの原料で作る“ホンモノのチョコレート”をみんなで作り食べてもらおう！ ということでスタートしたのが「ホンモノの手作りチョコレートワークショップ」キャラバンでした。

キャラバンがスタートしてすでに3年。全国あちこちにお伺いしました。北は北海道から南は九州。2015年末現在で約40カ所。実際厳密に作ろうと思えば、いくらでも難しくなるチョコレート。あえてシンプルなレシピと、「大人の泥んこ遊びだと思ってやりましょう！」の掛け声で開始するとこの会場も私の想像を超えるエネルギーと笑い声がまわっていました。

「カカオは熟成します。発酵食品です」。キャラバンでそんなことを言いながら、取り扱う側も時間をかけてこのカカオを知って行くんだなあと、沢山のことを教えてもらう時間でした。ワークショップ終了時の「これを家で作るにはどこで材料買えばいいの？」との問いは想定していましたが、その当時販売できる原料がすべて揃わず、苦い思いをしながら帰ることもしばしば。

最初の時から手作りキットの構想はありましたが、やっと皆さんに届けられることに。

遠く5000km向こうから届く作り手の温度感を皆さんに届け、そしてその皆さんの感じた温度感を向こうに届けるのがこのキットの役目かなと。「御縁」で繋がり「御円」になるには時間をかけて熟成していくことが大事。最初にみたカカオの塊が笑って見えたのは、そんなことを教えてくれたんだなあと旅の空の下思うわけでした。(つづく)



筆者プロフィール

出張料理「きまぐれや」シェフ 吉田友則

製菓製パンの専門学校で勉強した後、料理の世界に入る。長野県八ヶ岳の井出忠利氏に師事し、ジャンルに囚われない季節感を大事にした料理を目指すべく海外に渡る。帰国後、イタリアン、フレンチ、洋食屋などで経験を積み、口福感の残る料理を提供すべく独自の活動を展開している。日本一移動するレストラン「きまぐれや」は16年目を迎え、開けたドアは2400軒。



自慢する人

大田美保 / おおた・みほ
グアテマヤ代表

私

の魂のお仕事でもあるグアテマラの森からフエアトレッドで輸入しているマヤナッツを、仕事で得にくい富士山・河口湖地域の人たちにシェアしています。マヤナッツは古代マヤ時代から伝わるスーパーフード。森が燃やされてなくなつていつている姿を見て、森と人も動物もみんな幸せになれたらいいと思いはじめました。森に落ちているラモンの実を拾い、仕事で得にくい地元の女性たちがその実を加工しています。

一番長いお付き合いはマヤナッツクッキーの製造をお願いしている河口湖の障害福祉サービス事業所スイートベリーKASTUYAMAです。もう6年になります。ここでは、障害をもつ方たちが毎日クッキーを焼いています。それぞれの方ができることでやってくださっています。

次は、マヤナッツの袋詰めをお願いしている障害福祉サービス事業所pal-pal。ある日訪ねていくと、若い女性に「大田さん、お仕事もつとくださいね」と言われました。お仕事をたくさんお出しできるよ

わたしの友産友消じまん 07

マヤナッツの巻

うにこれからもがんばらない！と思いました。

そして、最後は、河口湖勝山のママさんグループです。マヤナッツの袋詰めをする所を探していた時、お友だちのKさんが、子どもが小さくて、仕事で得にくい子育て中のママさんたちに声をかけて、集まりました。みなさんここに集まって、子どもがいても仕事ができ、国際協力に関わることができ嬉しく無理なく続けることができているそうです。

マヤナッツを通して、グアテマラの森のママたちと河口湖のママ



河口湖のママさんグループ。



商品の種類も増えています。



子どもと一緒に。



pal-palの皆さん。



マヤナッツ(ラモンの実)を焙煎する。

たちと障害をもつ方たちとがつながる「友産友しよう」、共に生きる世界が広がっています。ここに幸せあり。

グアテマヤ

山梨県南都留郡西桂町小沼2744 《電話》0555-25-3275 《FAX》0555-25-7157
《Website》http://mayanuts.jp/

From East Timor【東ティモールより】

小さな種が芽を出し、花を咲かせ始めています。

2015年12月、エルメラ県の3グループの地域を訪問してきました。2010年以来、幾度となく議論を持ち、様々な試行錯誤をして失

敗も重ねながら、作物の多様化、収入の安定をめざしてきたGATAMIRとFitun Cataranoでは、色々な取組みが少しずつ成果につながり始めている様子が改めて確認できました。どちらの地域でもグループメンバーが協働で耕し、管理している共同菜園や各家庭の菜園が充実してきています。もちろん無農薬無化学肥料。これまでに学んだ堆



「自慢の菜園よ！」

肥・液肥や自然の防虫剤を活用しています。11月には、私たちの協力者でもあるエゴ・レモスさんが中心になって開催したPenna Youth Campに参加したメンバーの一人は「キャンプから戻って、そこで学んだことを自分の菜園で実践しているの！」と嬉しそうに菜園を案内してくれました。一方で種や苗については、課題が残っています。自分たちで種取りできる野菜、苗を育てられる果樹などの種類が限定されているので、どうしても援助で配布されたり、いちばで購入したりしたハイブリッドの種に頼ってしまう人が多いのです。2016年の目標として、各グループが自分たちの種子バンク、苗床をもつことがあ

がっています。女性メンバーたちもがんばっています。GATAMIRのオレンジワインは今年も好評で、グ

ループとして収入を積み上げています。また、4月にワークショップをおこなった改良かまども各家庭に導入され、有効活用されているとのこと。女性たちは「けむりが少なく、燃やす薪材も細いものから、すむから、すごく楽になったわよ！」と口を揃えています。

また、収入源の中心であるコーヒーについても少しずつ変化が見られてきています。コーヒーの木の高齢化により収穫量が減少してきているという問題に対して、2013年度に専門家を招聘して手入れの方法を習いました。その際にカットバックした木が丸2年たつて、新芽がしっかりと育ち、花も沢山咲いてすでに結実し始めているのです。

目先の収穫減を恐れず、率先してカットバックした何人かのメンバーによって、成果を目にすることができたおかげで、他のメンバーも後に続いてくると確信しています。

このように、小さくても沢山の種が芽を出して、花を咲

かせ始めています。2016年もみんなで協力して、土を耕し、水をあげて、さらに沢山の花を咲かせていこうね、

アルフレッド・ボディオスさんを偲んで

秋山眞兄／あきやま・なおえ APLA 共同代表

新年早々、残念なお知らせをしなければなりません。カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KFRC)代表のアルフレッド・ボディオスさん(通称アンボさ)が1月4日未明、心臓発作で逝去されました(享年63)。

アンボさんとは1996年からこれまでの20年間、一緒に考え行動する同志でした。彼の10年にわたる零細農村地域での活動経験からのアドバイスは、日本ネグロス・キャンベーン委員会(JCNC)の地域活動には不可欠なものでした。2001年に



そう話し合っています。(APLA事務局・野川未央) ■
 (注) コーヒーの木の高さを地上から30センチほどの高さで測定する方法。
 は故郷ナヨン村の住民から「よそさまのことだけではなく、自分の村をどうにかしてよ」との声を受けて村長となり、電気・水道の完備、協同組合設立など次々と村民の願いを実現させました。JCNCからAPLAに移行する時には、農民たちと膝詰めで話しあってくれたことで、KFRC設立が実現しました。その責任者として有畜複合循環農業を目指す若い農民を育てることに奮闘してくれ、成長してきた次世代にどのように手渡していくかを考えてはならないと話していた矢先の逝去でした。残念でたまりません。しかし、アンボさんが生涯を通して、貧しく小さくさせられている人びととともに生きようとした信念は、KFRCで育った若い世代が引き受けてくれると信じています。

【事務局だより】

事務局の動き(2015年11月～2016年1月)

10月 26日～11月 27日	グリーンコープ共同体“fromネグロスセミナー”が開催され、野川、津留が各単協を訪問しました。[おおい、ふくおか・北九州地域、おおさか、さが、かごしま、(鳥根)、ふくおか・福岡地域、ひょうご、ふくおか・中部地域、やまぐち、ふくおか・南地域、くまもと、おかやま(開催日順)]
10月 29日～11月 11日	フィリピン・ネグロス島に寺田が出張しました。期間中、ネグロス・サミット(11月7日～8日)、バランゴン・サミット(9日～10日)に参加しました。
11月 1日	土と平和の祭典2015に出店しました。
11月 12日	パルシステム埼玉平和募金団体交流会に大久保が参加しました。
11月 13日～14日	BMW技術全国交流会に寺田が参加しました。
11月 14日～15日	APLA福島ツアーを開催しました。
11月 15日	JCNC北海道交流会で寺田がネグロスの報告をしました。
11月 21日～22日	バタゴニア東京・吉祥寺ストアで開催された「エシカルマーケット」に出店しました。
11月 26日	埼玉県立杉戸農業高校に野川が伺い「ホンモノの手作りチョコレート」の出張授業を行いました。
11月 28日	埼玉県高等学校教職員組合(埼玉高教)学習交流集会での「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで野川が講師をつとめました。
11月 28日	チョコレート・アライアンス主催の「チョコレートナイト」にコアメンバーの一員として参加しました。
11月 29日	東京朝市・アースティマーケットに“P to P Café”として出店しました。
11月 30日	パルシステム東京・ふちゅう委員会主催の「ホンモノの手作りチョコーレート」ワークショップで野川が講師をつとめました。
12月 5日	第4回ロータス寺市に出店しました。
12月 7日	パルシステム埼玉・川口北鳩ヶ谷地区会主催の「ホンモノの手作りチョコーレート」ワークショップで大久保が講師をつとめました。
12月 8日～15日	東ティモールに野川が出張しました。
12月 9日	武蔵大学で大久保がバナナ募金や福島での活動について講義しました。
12月 12日	東京朝市・アースティマーケットに“P to P Café”として出店しました。
12月 16日	BMW技術協会若手幹事会に寺田が参加しました。
12月 20日	第9回国際有機農業映画祭に出店しました。
1月 8日	第9回かめのり賞を受賞し、共同代表の秋山、事務局の野川が表彰式に出席しました。
1月 9日	「こどもエコ広場新宿」で「ホンモノの手作りチョコレート」講座を担当しました。
1月 18日	hako gallery(東京都渋谷区)主催の「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで野川が講師をつとめました。
1月 19日	パルシステム東京・食育ポケット委員会主催の「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで大久保が講師をつとめました。
1月 21日	高麗川南公民館(埼玉県日高市)主催の「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで野川が講師をつとめました。
1月 23日	チョコレート・アライアンス主催の「チョコレートナイト」にコアメンバーの一員として参加しました。
1月 23日	ヒズー(広島県尾道市)主催の「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで野川が講師をつとめました。
1月 24日	岡山フェアトレードの会・JCNC岡山主催の「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで野川が講師をつとめました。
1月 24日	URBAN RESEARCH DOORS 虎ノ門店(東京都港区)での「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップ開催の協力をしました(講師は吉田シェフ)。
1月 29日	パルシステム埼玉・川口北鳩ヶ谷地区会主催の「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで大久保が講師をつとめました。
1月 30日	草津国際交流協会主催の「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップで野川が講師をつとめました。
1月 31日	東京朝市・アースティマーケットに“P to P Café”として出店しました。

事務局からお知らせ

「福島の子もたちに届けよう バナナ募金」へご協力を！
 20施設、約1400人の子もたちへバナナの発送を継続してきていますが、募金額が減少してきております。皆様のご支援・ご協力、よろしくお願いたします。

ドキュメンタリー映画『バナナの逆襲』、2月27日(土)より全国で順次公開！
 中米ニカラグアのバナナ農園の労働者が、農業被害をめぐる超巨大企業を訴えた。その裁判の過程を記録したドキュメンタリー映画が、思わぬ波紋を呼び、映画界を巻き込んで超巨大企業とメディアの暗部をあぶり出していく……。スウェーデン発、“甘い”バナナをめぐる“甘くない”ドキュメンタリー。APLAでは、この作品の広報協力をおこなっています。また、前売り券も取り扱う予定ですので、ご興味のある方は事務局までお問い合わせください。

編集後記

2016年最初のハリーナは、若い駐在員の目から見たネグロスの現状をお届けします。APLAの前身である日本ネグロス・キャンペーン委員会が発足して今年で30年を迎えます。そして今、カネシゲファーム・ルーラルキャンパスという小さな農場から巣立ち、農民になることを決めた若者たちが各地で奮闘しています。その基盤づくりに多大な貢献を果たしてくれたアルフレッド・ボディオスさんが突然亡くなりました。ご冥福を祈るとともに、彼がいつも夢見ていた、「自立し元気に農業を楽しむ」若者たちがネグロスの大地に根を張っていく風景を、これからもみんなで力を合わせて作り上げて行きたいと心から思っています。(大橋)

年末年始を沖縄・辺野古で過ごしましたが(編集後記での辺野古の登場回数が多いです)、あまりに暖かく、晴れた日の昼間は半袖Tシャツでも過ごせるほどでした。やはり、気候変動による気温上昇の影響なのでしょう。

TOPICSでCOP21についての報告を寄せてもらいましたが、私たち人間は今後どのような道を進むのか。待たなしの状況が続いているのを感じます。(野川)

ハリーナ HALINA

2016年2月号 vol.02-no.31
 2016年2月1日発行

【編集長】
 大橋成子

【編集者】
 野川未央

【表紙写真】
 長倉徳生

【デザイン・制作】
 十年舎

【編集・発行】
 特定非営利活動法人APLA
 (APLA/あぷら: Alternative Peoples Linkage in Asia)
 〒169-0072
 東京都新宿区大久保2-4-15
 サンライズ新宿3F
 tel. 03-5273-8160
 fax. 03-5273-8667
 e-mail info@apla.jp
 url http://www.apla.jp

【印刷】
 株式会社セイズ